百人一首聽書

全

百人一首聞書

丸田武八元亮

宏曜文庫

古今の序に
やまとうたは人のこゝろをたねとしてよろづのことのはとぞなれりける世の中に
ある人ことわざしげきものなれば心におもふことを見るもの聞くものにつけて
いひいだせるなり花になくうぐひす水にすむかはづのこゑをきけばいき
としいけるものいづれか哥をよまざりけるちからをもいれずして
あめつちをうごかし目に見えぬおにかみをも
あはれとおもはせ男女のなかをもやはらげたけきものゝふの心をも
なぐさむるは哥也

まこと
しきしまのみちをさかんならしめしゆゑん

百人一首古説の序に貞徳のいはく
むかしの哥仙達のうちにも人丸赤人とて歌聖とも申しならはしたる
平常縁といふ人宗祇といへる法師にをしへけるをもしめされけり宗祇
牡丹花肖柏といふ人にあたへけるより文字のかくて今世の中に

百人一首ハ権中納言定家卿小倉山庄之張附ノ
色紙ニ有之を好人字多れモノナリ
定家ハ長寛元年生仁治二年八月廿日薨去人ナリ
此頃ハ六百年余事より万葉集時分より
哥も古今よりの哥の風体されとも定家ハ此時
の名人にて一風を後世に残ス今世多くハ此人の風ニ
風の哥よむ事多し
百人一首ハ其哥文哥を撰て定家
右の如くや
此人 新古今集撰者 百人の中一ヤ
新勅撰撰者

記を見ると

（後鳥羽院ハ元久元年霜月崩ス）

藤中納言定家

後鳥羽院母ハ藤原兼子親忠女号卿二位中人美福門院
の女房ト云ヘリ俗者ノ云ハ姑ノ為ニ捨子ト云ヘリ法名明静仁治
朝臣　西二位兼子ノ弟ノ子ト云ヘリ法名明静仁治
二年八月廿九日薨八十四歳　本ノ名光家ト改ム光ト略ス
定家ト改ム　号京極殿ノ兄ノ子ノ弟ノ子
御堂関白道長―長家―忠家―中納言従三位　中納言従三位
後鳥羽―後成　中納言従三位　定家
定長　法名家蓮

人皇三十九代　天智天皇　舒明天皇ノ皇子　姓中の大兄の皇子ト云ヘリ又葛城皇子ト云ヘリ
齋明天皇ニ次ク

天子民ノ心ニ成テヨミケル歌

秋ノ田乃カリホノ庵ノ苫ヲアラミ　我衣手ハ露ニヌレツヽ

（「カリホノ庵ト云コト」「作ヲアラミハ作ヲアラクアミタルコトアラミハアラサト」）

古後撰集ノ六秋ノ哥ニ有　又古今集六帖ニ出寄人不知ト有歌ニ　秋田カルカリホ
ヲ作リ我ヲレハ衣手寒シ露ソ置ニケル　是ヲ宮家ノ直ニ天智帝ノ御
歌ニスルヤ天智帝ノ比ノ幹ニアラズトカ

人皇四十一代　持統天皇　天智天皇ノ第二白王女　天武帝ノ后天武帝去世テ後ニ遷女帝ノ

春過テ夏キニケラシ白妙ノ衣ホシテフ天ノカグ山

（「ケラシハ夏来タルト」「白妙ハ白キモノ衣ノ冠字」「ホシテフハ衣干トカ」「カグ山ハ大和国」）

古新古今集ニ有　又萬葉集ニ出歌ニ春過テ夏来ルラシ白妙ノ
衣干タリ天ノカグ山トアレハ歌ノサマヨロシ定家卿直ニ出シタルヤ
百人集ノ歌ニ宜

家ノ門ニ柿ノ木有是ヲ人性トスルト云　柿本人麻呂

アシビキハ木ノ名ヲ云シミキトミテ砂ヲ守ヲ
ホノ有山是ハ山守ヲ

山鳥ノ尾ト云山ノ字云生ユヘアシビキト上ニヨリ

アシビキノ山鳥ノ尾ノシダリヲノ長々シヨヲ　獨カモネン

郭公ノ鳴ヲ十月ノアヤメ草アヤメモヒラメ高キヲスルカナリト云哥ト序ノ字同意

古萬葉集十二有人ノ名人ナリ赤人ヨリ二手ト云

シタリ尾ト云ハ山鳥ノ尾ノ長キヲ云

ナガシシヨヲト云生ス序ノ字ニ上ノ句ヲ長キコトヲ云

元正天皇ノ比人

又紀ノ俳神龜ノ比人ト云

山ノ邊ノ性　山邊赤人

田子浦ハ駿州イホ原郡

田子ノ浦ニウチ出テ見レハ

外ヨリ出テミルトタヘハ山ヲト過リ出テ見レ

白妙ハ衣ノコトヲ云白キコトヲ云

白妙ノ富士ノ高嶺ニ雪ハフリツヽ

ツヽハ三重ニ云ハ

古万葉集ノ内長哥ノ末ニ田子ノ浦ヨリ出テ見レハ富士ノ高ネニ雪ハフリツヽ

ツヽハ重ヲ云ヨトモ云從ノ万葉ノ中ニ

此哥ニ白妙悪

ハヨトモ云真白ヲ富士ノ高ネニ雪ハフリツヽ

ヲ出テ見レハ真白ヲ富士ノ高ネニ雪ハフリツヽ

ヲ出スカフ宜

後新古今集ニ出レ哥百人集ニ同尾ノ哥

天皇ノ末此比大夫ノ位ニ居ル人

猿丸太夫　何人ト不知

此哥モミヂチリテ後鹿ノ音ニハケナクニ依テ増テ悲シキト云事

奥山ニ紅葉フミワケ啼鹿ノ聲聞時ハ秋ハカナシキ

右新古今集ニ出不知哥人維定親王ノ家ニテ哥合ノ哥ト有

大伴ノ性　中納言家持

山ノ邊ノ大臣万葉集ナト集ル人ナリ　光仁天皇比ノ人

鵲ノ橋ハ林王中ノ橋ト云　鵲ノ橋ハ宮殿ノ

鵲ノ渡セル橋ニ置霜ノ白キヲ見シハ夜ノ更ニケル

右新古今冬ノ部ニ出

中務輔正五位上船守ノ子　安陪仲麻呂

孝元天皇ノ末裔　靈亀二年多治比縣守使　唐仲丸ト云

唐使ト唐ニ渡ル唐ノ位ニテ官ヲ帰國ニ水中ニテ死スモ云日本ニ又居人又唐ニテ死ストモ云　朝衡ト唐ニ名ヲ云

「アマノ原ハ天ノコトアヨウナバラトモ云ヒ又仏日記ニハアヨウナバラト有後ニ直トカ」

アマノ原フリサケ見レバ春日ナル三笠ノ山ニ出シ月カモ

「大和國春日三笠山」「出シ月カモハ唐ヨリ詠シテ凝ノキトハ」

右日本ニ歸ヘルセツ唐人送リシ事モ有此哥時ヨメルト云 古今集第九ニ有

送秘書晁監之歸日本詩 有是仲丸カ日本ニ歸リ海中ニテ流死ス

送秘書晁監之歸日本詩 喜撰法師

仙人ノ名ト云 或ハ多田人ト云 或ハ行基菩薩ト云 或ハ行基ノ弟子ト云 或ハ僧ト云 或ハ俗ト云 其説多シ

我庵ハミヤコノタツミシカソ住世ヲウヂ山ト人ハ云ヒケリ

「シカソ住ハ都ノ人ハ山ニテ住ヒ云ヒワレスミハケヤウニシカト住イフコトロナリ」

「ウヂ山ハ山城國ニテウヂ山ノコトニヌヨリウキト川ヲ所ノ人ヨミテ宇治ト云ヒ山ニ如ク住マヒシ山ヲ見サルトモ云ヒ」

古今集ニ出ス寄人不知ト有 ゐ歌と有

小野良樹 定キナト、 性ノ人カ 性氏不祥

小野小町

文德天皇ノ盛ノ人ト云 安勇ニ河ノ美ニ被任ル時詠リシテ有

花ノ色ハウツリケリナ徒ニ我身ヨニフル詠セシマニ

「ケリナハ早ク花ハ散リハテヌト云コトヨノ事ヲサカメイルマニ花モ不見サル心」

「ナカメハ物ヲウラメシクナカメ詠ニナカメ何ヨ只見ルヨリハサシ相違セシナリ此ナカメハ長雨ト別カケ云ヒシナリ ナカ雨ニシタルトモ云 光夫婦ノ中ナカメナカニメトモ云」

古今集ニ少 此ヨト云事ハ男女ノ間ニテ夫婦ノ中ノコトナリ世間ナト云テ云ヒナ コノ故ニヨリ只天地ノ間ヲ云ニハアラス

延喜廿年中古年近江ノ相模ノ二任ト有

蟬丸 性何ナル人カ不知 隨筆ノ多クハ仙人ト云 或ハ後國ノ帝ハ蟬ヲ好ミ給ヒシ故ニ蟬ヲ名ト云説多シ

「行モ別レモヘルモ別レニテハト云ハヨフサカノセキト云ハ諸ニヨリ落合道ニテ中ハ行ヒ ヨリ来ルモ出逢所 ヨリ分ルナト合何ニテ別ニテ云ヒ」

コレヤコノ行モ帰ヘルモ別レテハ知モミラヌモヲフサカノ関

「コレヤコノハヨフサカノセキユヘコノユヘト云ヒ」

「ヨフサカノセキハ近江ノ國」

古後撰集ニ逢坂ノセキニ庵ヲ結ヒ行コウ人ヲ見テ寄ト云 此哥別レハト有

ニテハハ直カ 素性法師集ニモ出ス有

性ノ野 良岑 糸 議 竹皇

素和元ケニ唐使有舟ニ三四ト出ニ舟ニ乘リ出舟ノ所ノ舟ニ乘度頼不叶ソイテ不行 素和六四月隱岐國ノ海人同七月歸京 仁寿二年ニ卒

「和田ノ原トハ海ノ事」

和田ノ原ハナ馮カケテ漕出ヌト人ニハ告ヨアマノ釣舟

「ハナ馮ハ波ノ馮ヲ云」

「掘師舟」

古古人テ集ニ出ル端書ニ隋岐國ニ流サレタル時ニ舟ニ乗テ京ナル人ノ許ニ遣ハシケルト有

良峯宗貞

僧正遍昭

「嶽山ニ登テ別堂ニ入テ修行シケル時ニ」

「空吹風ヲ云」

天津風雲ノカヨヒヂ吹トヂヨ乙女ノ姿シバシトヽメン

「天女ナリ」

「姿ニハシバシトヽメハコヒノ姿ヲ見テ思ヒ年タルコト」

古古人テ集ニ出ハシ書ニ五節ノ舞姫ヲ入テヨメル

人皇廿七代
名ハ貞明世尊
手本経ノ女

陽成院

清和帝ノ白玉ト云人誤テ殺ト云ヒシカ帝約束悪ク依テ陽成院ニ入夢ヲ覩テ
ヨワテ云カ

雄略天皇ノ時天女下テ浴ルト云

「ツクバ子ハ常陸ノ國筑波山ノ下」

後撰集二百

ツクバ子ノ峯ヨリヨツル三ナノ川恋ノツモリテ淵トナリヌル

「車ヘヨツル川是迄ハ序哥」

「恋哥深ノツモル恋ト云ヲ上ニ川ヨセテ下淵ト云ヒ恋ノ哥ニタメシ」

河原左大臣　元蝎ノ大臣冨タル人

「陸奥ハテ忍郡ナリ名所モテズリト云古衣ヲ深ル二石ニアテ、置花ヲトリスリツケ深ル都ノ小菊ナドニテモ世ル忍郡ニ石アリ是迄序哥」

長ル天皇ノ天ノ名ナリ

ミチノクノ忍フモヂズリ誰ユヘニミダレシソメシ我ナラナクニ

古古今集ニ出ミチノクノシノブモヂズリ誰ユヘニミダレシト思フ我ナラナクニト哥ノサマヨシ

人皇廿八代
名時康

光孝天皇

仁和帝ノ親王ニヨワシコシ時ノ哥
陽成天皇ノ次

君ガタメ春ノ野ニ出テ若菜ツム我衣手ニ雪ハフリツヽ

古古今ニ出ハヒトカキニ仁和帝親王ニヨワシコシケル時工人ニワカナ五ヒケルト哥ト有

氏在原 姓朝臣 正三位 中納言行平

桓武天皇女 伊登内親王ヲ妻トシテ業平朝臣ヲ産ム
采女天皇ノ皇子 伊保親王御子業平
兄因幡守ニ成ニノ下ルト云

立ハカシイナバノ山ノ峯ニヲフル待トシ聞ハ今ハヤヘリコン

「因幡国ノ山」
「又ト云ヒ」

因幡守ニ被任ル時ノ歌トキヨム若オトヽキヲ
ロヘリコントヽ

古今集ニ出ル歌ト有

在原業平朝臣

始貞観四年従五位上因幡守ニ成ル 元慶四年蔵人頭ニ成ル 又従四位下ニ成ル
伊保親王ノ五男 行平ノ弟
紀有常女ノ産レ

千早振神代モキカズ竜田川カラクレナイニ水クヽルトハ

「千早振神ハ悪神ノ事トアヤニキヲナトアル神代」
「キヲズ古ノ神代ニアヤニキヲアルトモ其神代ニモカヽルメリ云」
「大和ノ国 唐紅」
「クヽリ染ノヤウニ 水ノ色ニキヲ 古縦横ナリト云 皆業平ノ事」
「後ト云フ」

古古今集秋ノ哥 端書ニ二条ノ后ノ宮ノ東ノ后御休所ヤケル時ニ四条ノ大ノ御ト有

藤原敏行朝臣

謹足云ヲ不祥

古古今集恋ノ哥 言葉ノ中ニ寝ヲ見テモ人目ヲ慎ルト云フ 夜ノ夢ノ見テモ人目ヲ慎ルト云フ意ハ恋ヲ人ニ知ラレヌ事ヲ云

住ノエノ岸ニヨル波ヨルサヘヤ夢ノカヨヒチ人目ヨクラン

「住吉ノ江ノ岸ニヨル波トヽ云フ」
「ヨルヤ夜ヤ 夜ヤ ヨル波ヤ 是ヲ」
「夜ヤヤト云フ」

ヲヒ人メヨクルヤウト云フコト

古古今集百恋ノ哥 言葉ノ中ニ寝見ヲ人ノ所ノ宮ノ哥 人ノ哥

伊勢

伊勢守従五位ノ娘 伊勢ノ御

ナニハガタミジカキ芦ノフシノ間モアハデコノヨヲスグシテヤ

「難波潟芦ノ事ヲキヽ」
「芦ノナニハガタノ実ノ事」
「ミジカキフシヲ云フタメ」
「人ヲ眼心ニ居ニ 逢ヲ云ヒ居ルヤト云フ」

古新古人ノ集ニ有 ヒトヤ

元良親王　陽成天皇ノ皇子

ハビヌレバ（ハビヌレバ　親密ニナレテ）
ハビヌルバ今ハタオナジ（今ハ　モウハ　ハタハ　又ハ　同）
十二ハナル身ヲ盡テモアハムトソ思フ（十二ハナル身ヲ盡テモ　ナニニモナキ　知ラレテ　ナニハトモナニハ　ナイ事　捨テテ　ナイ物　ワケテ　ヲ　ヲム）

古後撰集恋ノ部ニ有　詞書ニ事出テ後京極ノ御手ニ書レタト有　拾遺ニハ載ラレタト有

良山法師ノ子　後僧正偏照

素性法師

人ヲコムトイヒシバカリニ長月ノ有明ノ月ヲ待出ルカナ（秋　来ヲ待ト云テ　ハヤ有明ノ月ヲ待タト云テ　ヨソリ出ル月　カナタニソクノ言ハ）

古今集恋ノ部ニ出　新古今ニ載ル

天武天皇ノ末ノ人　性喜撰人

文屋康秀

吹カラニ秋ノ草木ノしをれしバウベ山風ヲ嵐トイフラン（吹カラニハ吹ナカラト云テ　古ノ言ハ後ノ歌集ナトニハ吹ハ又ニ用　ウベナト云　ムベハ俗　荒ストヲ云テ　アラシ　ラニハ人ノ　云ダロウト云テ）

古今集三有　秋ノ歌　初句ノ字ノ所合ノ哥

大江ノ御ノ子

大江千里

月見レバ千ヅニ物コソカナシケレ我身ヒトツノ秋ニハアラネドモ（月ハカナシキモノ　人見テカナシキ情ヲナリス　哥ノ通）

古今集二出　秋ノ部　詞書ニ維貞ノ家歌合ノ哥

名ハ道實
字ニ
氏菅原

菅家

「サテ此作ハ之ヲサモトリアヘズ」

此タビハ又サモ取アヘズ手向山モミヂノ二シキ

「赤色ノ紅葉」

「スサノヲ抜剣ヲ神ノ巻ノマニマニト云フ」

神ノマニマニ隨意ナ

古今人テ集四鶯後ノ部ニ出 言ハ書ニ年暮ノ境ナラニヨウシマニケル時タムケ山ニテ

ヨメル 左 遷 前ノ事

内大臣高藤云ノ子宣ニカト云人

三条右大臣

「酩酊ノ原」

名ニシオハヾヨフサカ山ノサクラカヅニ人ニシラレデクルヨシモガナ

「近ク山」「サクラ多ク有ル山ノ名」「桜ノ事ヲ云」「クルヤウトモ云」「モガナ願言」

古後撰集恋ノ部ニ有 言ハ書ニ女ノ元ヘ忍テ行トカ

天日尊ノ御ノ卿ニテカトリ後ニ故左大臣ニ遷 左遷 変ニ流罪ツリニ大宰府ト

「アヒニシニト」

大臣ニ高藤云ノ子ニカト云人

貞信公

「サガニ有山 大井川ノ北ノ」 大井川ニテ見ラレテヨム

小倉山峯ノ紅葉ハ心アラバ人ノ一度ノ御ユキマタナン

「心アラバ紅葉ヨ今一度ノ御幸ヲ待ケリ」「ナニカヲイノチニカヘテマテカシト云」

古後撰集恋ノ部ニ出 言ハ書ニ寛平ノ御時ニ大井川ニ御幸アリテ行幸モアリヌベキトコロナリト仰セラレニ事ノヨシ奏セヨト申テ下ト有 「酒宴ノ時」

貞信公ハ道真ノ敵ノ部ニ出 言ハ書ニ寛平ノ御時ニ大井川ニ御幸アリテ行幸モアリヌベキトコロナリト仰セラレニ事ノヨシ奏セヨト申テ下ト有

中納言兼輔

言葉ノ縁タヾ続ケノ用

「三カノ原山脇ノ国サカヒニ有ノ」

三カノ原ハキテ流リヽイヅミ川イツミキトテカ恋シカルラン

「イツミキトテイツ見タリシカ恋シカルラン」「イツ見人ヲキニテ恋ルナト」

古新古今集恋ノ部ニ有 歌ニテハ

貞信公ハ道真ノ敵ノ部ニ有 言ハ書ニ

貞信公ハ道真ノ敵ノ部ニ有

武部仰雄忠親

源宗于朝臣

山里ハ冬ゾサビシサマサリケル（マサリケルハマサルハイトニテ タニソクノ意ハコヽニハケリト置意上ニゾト有ユヘケルトヨク）
人メモ草モカレヌト思ヘバ
古今集冬ノ部ニ出 ハヽカキニ冬ノ題トテヨメル 影印

凡河内躬恒

甲斐ノ國ノ目ニトテ居ル人 六七位ノ人
古今集ヲ集タル人

心アテニオラバヤオラウ初霜（初霜ヲ白キ花ニテ白キカ外ノ色カ
ナリ心覚ノ色キヲヨボトニテ）ノヲキマトハセル白キ菊ノ花
古今集秋ノ部ニ出 言ハヽ白菊ノ花ヲヨメル

性ハ公

壬生忠岑（フ佐ニヨムベシ）

此人猶ト不知

有明ノツレナク見エシ別レヨリ暁（別ニ暁ヲウキモノト思フ）バカリウキモノハナシ（「ホトヽニテ」）
古今集恋ノ部ニ出

性ハ名称

坂上是則

朝ボラケ有明ノ月ト見ルマデ吉野ノ里ニフレル白雪（「ツヽミニ月ト見シトヲ雪トニテ」）
古今集冬ノ部ニ出 吉野ニ大和ヲヨマヌ歌ハヨモノフルニヲヨマヌ

惟八宮彩

春道列樹

此人ノ書自筆ト云秘号遠ノ事ニアラズ

山川ニ風ノカケタれ[花ヘホケトモ波ヲヒカラミトヲ云テ水ノ流ルトムモノ]ばカラミハナカレモアヘズ紅葉ナリケリ

古今集春ノ部ニ出 言ハ出ニ志賀ノ山越ノ僧正遍昭ノ歌ナリ

紀友則

古今集古日花花期撰者ト有

久カタノヒカリノトケキ[久カタハ日サスヒカリノ家ナ]春ノ日ニシヅ心ナク花ノチルラン[春ノ光アリ長キ歟]

日日西ヲト空ノ時ナ

古今集春ノ部上出 さゝの葉の末の露もの思ふと

藤原興風

誰ヲカモ知ル人ニセン高砂ノ松モ昔ノ友ナラナクニ

[カモ人ナ[illegible]]

[高砂ノ松モ昔ノ友ニナラナクニ友トスル人ナリ]

[ナクニハヌ人ベタル意]

古今集雜部ニ有 影をだに

記貫之

古今ノ序ナトニシル人 御書所ノ別当 外従五位

人ハイザ心モシラズ古郷ハ花ゾ昔ノ香ニ匂ヒケル

[主ノ心ハ昔トカハルカモト云心]

[昔宿リシ人ハ花昔ニカハラズ香モ有ハ主モ初瀬ノ山ノ歌ナリ]

古今集春ノ部ニ有 初瀬ノ山ノ歌ナリ

清原ノ真人

清原深養父

何人ノ子ナルヲ不知

夏の夜はまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらん

古今集夏の部ニ 月のおもしろかりける夜あかつきかたによめると有

康秀ノ子

文屋朝康

白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉そちりける

後撰集秋の部ニ 延喜の御時うたメしけれはト有

季縄少将ノ女

右近

忘らるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくもあるかな

拾遺集の恋の部ニ有 大和物語の書ニ男の忘しと万の事をかけてちかひけれと忘られにける後にいひやりけると有

中納言希世ノ子

参議等

浅茅生の小野のしの原しのふれとあまりてなとか人の恋しき

後撰集恋ノ部 言ハ出ニ 人につかはしける

光孝天皇四節
父八篤行

平兼盛　越前權守任

古拾遺集ニ忠ノ詠ニ出ハ天暦ノ御時ニ云々

忠岑ノ子　壬生忠見

古拾遺集ニ天暦ノ御時ニ云々

清原元輔

清原元輔父ノ孫
下野守顯忠ノ子

古後撰集ニ言ヒモ云々

中納言敦忠　枇杷中納言

古拾遺集ニ云々

三条右大臣
貞[illegible]

中納言朝忠

世中恋しきかたよりをとこの
[illegible]

[illegible]の事の[illegible]

古拾遺集恋の歌ハこゝ[illegible]

九条右大臣
詮[illegible]

謙徳公

名 [illegible]

[illegible]

[illegible]

古拾遺集恋の歌 [illegible]

曽禰の連
[illegible]

曽禰好忠

[illegible]

古新古集恋の歌 [illegible]

何人歟

恵慶法師

八重葎[illegible]

古今集[illegible]

源重之

大中臣能宣朝臣

藤原義孝

藤原實方朝臣

藤原道信朝臣

古大将道綱母

中納言道隆公

儀同三司母

大納言公任

古千載集雜の部

父大江匡時卿母皆安芸守女

和泉式部

一条院后の宮藤原の彰子に仕へ人 寛弘七年正月十日卒

古後拾遺 恋の心を詠ませ給ふ

紫式部

父藤原為時の女

大弐三位

大弐書 一条院御乳母 道長の二位

赤染衛門

大和守時通の女

小式部内侍

大江山いくのの道の遠けれ

伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重桜

清少納言

左京太夫道雅

今はたゞ思ひたえなんとばかり

權中納言定頼

相模

古千載集

相模

大江公資の妻

古後拾遺集

周防内侍

後冷泉院の女房

前大僧正行尊

古今著聞集

周防内侍

周防守平経仲の息女

後冷泉院の女房

古千載集

六十七代天子

三條院

冷泉院親王

心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな

後拾遺集雑の部

能因法師

肥前守橘元愷子

嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり

後拾遺集秋の部

法師不成前長愷と云人

良暹法師

何人欤不知

秋夕ぐれはいづくも淋しきと云事

淋しさに宿を立出て眺むればいづくも同じ秋の夕ぐれ

後拾遺集の秋の部

大納言経信

桂中納言道方卿子

夕されば門田の稲葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞ吹く

金葉集秋の部

師賢朝臣の梅津の山里にまかりて

山里の山庄にて

後朱雀院皇女

祐子内親王家紀伊

一説経方の女 紀伊守重経妹なり 或は経方妹とも云

「たかしの浜ハ和泉国名所なり」

おとにきく たかしの浜の あだ浪は かけじや袖の ぬれもこそすれ

「世にかくれなき名のたかしの浜のあだ浪とかけたり」

「かけじとハ 思ひかけまじと云 袖もぬれなんと云」

右金葉集恋の部 堀川院の御時艶書合によめる

権中納言大江匡衡孫 成衡の子

前中納言匡房

「高砂とハ山の事也」

高砂の をのへのさくら さきにけり とやまのかすみ たたずもあらなむ

「をのへとハ山の峰を云」

「とやまハ外山と書」

右後拾遺集春の部 内大臣の家にて人々酒たうべて歌よみ侍りけるに 遥かに山の桜を望むといふ心をよめる

大納言経信の子

源俊頼朝臣

うかりける 人をはつせの 山おろしよ はげしかれとは いのらぬものを

「人を初瀬の山おろし 初瀬の観音へ祈念を」

「はげしかれとは いのらぬものを」

右千載集恋の部 権中納言俊忠の家にて恋十首の歌よみ侍りける時 祈れども逢はざる恋といふ心を

右大臣俊家の子

藤原基俊

「契りおきしとハ」

契りおきし させもが露を 命にて あはれことしの 秋もいぬめり

「させもが露とハ」

「いぬめりとハ 去ぬると云」

右千載集雑 僧都光覚維摩会の講師の請を申しけるを たびたびもれにければ 法性寺入道前太政大臣に恨み申しけるを しめぢが原と侍りけれども 又その年ももれにければ よみてつかはしける

法性寺入道前関白太政大臣

和田の原 八十島かけて こぎでぬと 人には告げよ あまの釣舟

右新勅撰集 羇旅の歌

三十五代天皇 崇徳院

瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の われても末に あはむとぞ思ふ

右新勅撰集 恋の歌

天満宮 源兼昌

淡路潟 遠ざかりゆく 波の間より 小舟にのこる 秋の月かな

右同集 秋の歌

左京大夫顕輔

秋風に たなびく雲の 絶えまより もれ出づる月の 影のさやけさ

右新勅撰集 秋の歌

待賢門院堀川

長からん心もしらず黒髪のみだれてけさハ物をこそ思へ

千載集恋の部 百首の哥奉りける時恋の心をよめる 堀川

後徳大寺左大臣

ほとゝぎす鳴つる方をながむればたゞ有明の月ぞのこれる

千載集夏の部 暁聞郭公といへる心をよみ侍りける

道因法師 俗名敦頼 従五位下右馬助敦頼

おもひわびさても命ハあるものをうきにたへぬハなみだなりけり

千載集恋の部 題しらず

皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞなくなる

千載集雑の部 述懐百首の哥よみ侍りける時鹿の哥とてよめる

左京大夫顕輔の子　藤原清輔朝臣

右、新古今集雜の部　俊恵法師

俊頼朝臣の子　俊恵法師

右、千載集恋の部　西行法師

俊頼朝臣の子　西行法師

右、千載集恋の部　蓮法師

俊頼朝臣の子　蓮法師

右、千載集恋の部　藤原清輔朝臣

新古今集　雜の部

皇嘉門院別当

皇嘉門院は崇徳院の后也 此門院に仕うる別当也

なにはえの芦のかりねの一夜故身をつくしてや恋わたるべき

千載集恋の部 摂政右大臣の家の歌合に旅宿逢恋といふ心をよめる

式子内親王

玉の緒よたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

新古今集恋の部 百首の歌の中に忍恋を

後白河院皇女仕うる人

殷富門院大輔

みせばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず

千載集恋の部 歌合し侍りける時恋の歌とてよめる

後京極摂政前太政大臣

蛬啼や霜夜のさむしろに衣かたしき独かもねん

新古今集秋の部 百首の歌奉りし時

源三位頼政女

二條院讃岐

讃岐ハ源三位頼政女二條院ニ仕ふ女房也

我袖はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかわくまもなし

右千載集恋の部

[illegible]

左大臣実朝の事

鎌倉右大臣

世の中はつねにもがもななぎさこぐあまのをぶねのつなでかなしも

右新勅撰集羇旅の部

[illegible]

藤原雅経の事

参議雅経

みよしのの山の秋かぜさよふけてふるさとさむく衣うつなり

右新古今集秋の部

[illegible]

法性寺殿道云の子

前大僧正慈圓

おほけなくうきよの民におほふかなわがたつ杣にすみぞめの袖

右千載集雑の部

[illegible]

中宮門右兵衛督家公卿

入道前大政大臣

花さそふ嵐の庭の雪ならで　ふりゆくものは我身なりけり

古新勅宣集出　言葉書よりとよみ侍りける

中宮権亮修理大夫

權中納言定家卿　新古今集撰者

ながめつるかなしの月の宿しこそ

古新勅宣集恋の部　建仁六〇内裏哥合

三十ノ光隆ノ曹　従二

第九源氏光隆卿仲俊

正三位家隆

本名藤原氏家隆　三十二位　参議　仁上公人　母ハ宮内卿基親女　新古今撰者

ふるさとの小川の夕ぐれは　御禊ぞ夏の始なりける

古新勅宣集　夏部　寛喜二〇　如法殿内の小屏風

八十三代ノ天皇

高倉院第四皇子

母信隆女藤原氏

後鳥羽院

法名金剛定　仏名　法名良然　建久元年二月廿日崩御　建久元年二月廿日奉移二階堂　延慶二年

井氏源家ニて隆と名付ける　伝道ニ天皇ニ　源隆

流しもすると云也 是は隠岐へ流され給ふ時 松平の修理大夫かくして隠岐の国へ行幸なし、
世の人ハ消え流る 又 れも思ふをとさめ給ふ 吾輩ハ左川のを
御し 世をさそふまいらすと 是と云事有 少年なるの頃の 北条の事にて大悪人道の

八十四代天皇
後鳥羽院第三皇子
母修明門院藤原重子範季女

順徳院

諱守成 在位十一年 承元四年十一月廿五日受禅 十二月廿八日即位 承久三年四月廿日譲位 同七月廿一日移佐渡国 仁治三年九月十二日崩

一 大宮の事

百敷や ふるき軒端の しのぶにも なほあまりある 昔なりけり

一 軒端の忍のふと云ふ詞に かけて

一 昔より尊しと思ふ事の余りあるを云

古 新院様の御製也

百敷やハ大内と云詞なり 軒端ハ大内と云也

昔後鳥羽院御在位中の御事にハ 殿上なにゝ ……

古ハ 昔をハ恋しく思ふと云也

古 二天皇 百人首の末に出給ふ事 後人御心を付て ……

右文政七甲申年九月出来
藤原朝臣井関伊賀幸吉先生ヨリ聞書記